未来につなぐ、夢・希望・感動

～京都スタジアム(仮称)の整備に向けた要望～

平成２５年１２月

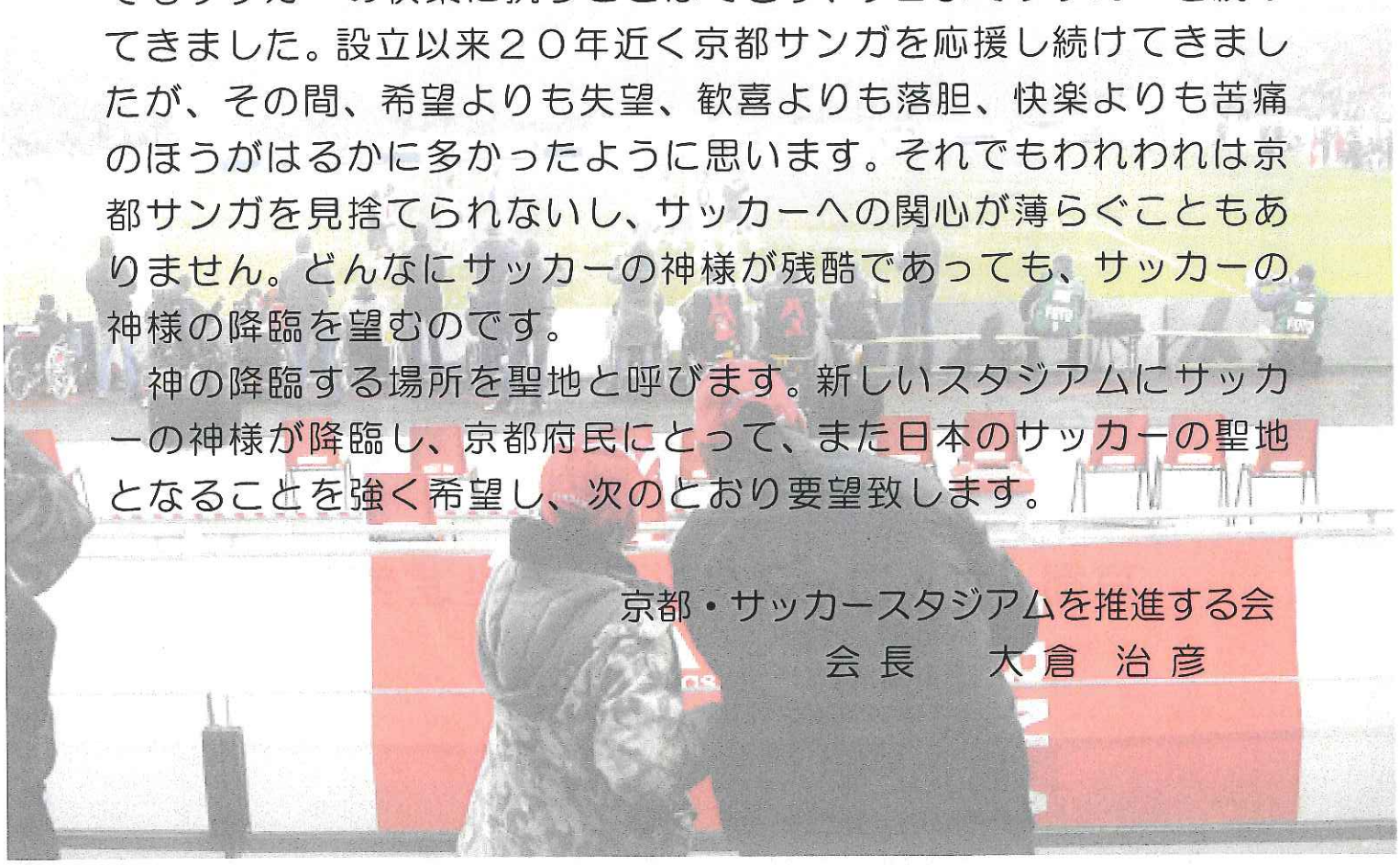
京都・サッカースタジアムを推進する会

京都・サッカースタジアムを推進する会では、京都府民の長年の夢であるスタジアムの建設に向けて約48万人の署名を集め、一昨年6月に京都府に提出しました。これを受け、京都府におかれましては、球技専用スタジアムの建設を決定され、亀岡市を建設地として選定し、現在整備に向けた準備を進めておられます。今回の京都府の決断と熱意に、深く敬意を表するとともに心より感謝申し上げます。

この度のスタジアム整備により、サッカーを「する」人も「見る」人も、老若男女が一つになって夢・希望・感動を共有することができ、そして「つながる」ことによりコミュニティーが形成され、ひいてはそれが地域社会の未来に貢献することを期待したいと思います。

スポーツは、夢・希望・感動を与えてくれます。しかし、サッカーの神様はいつもそんなにやさしくはありません。「ドーハの悲劇」を覚えている人ならば、サッカーの神様の与える試練が如何に衝撃的で過酷なものかよく理解できるでしょう。私自身長年サッカーをしてきましたが、汗と涙の記憶しか思い出せないくらいです。それでもサッカーの快楽に抗うことはできず、今日までサッカーを続けてきました。設立以来２０年近く京都サンガを応援し続けてきましたが、その間、希望よりも失望、歓喜よりも落胆、快楽よりも苦痛のほうがはるかに多かったように思います。それでもわれわれは京都サンガを見捨てられないし、サッカーへの関心が薄らぐこともありません。どんなにサッカーの神様が残酷であっても、サッカーの神様の降臨を望むのです。

神の降臨する場所を聖地と呼びます。新しいスタジアムにサッカーの神様が降臨し、京都府民にとって、また日本のサッカーの聖地となることを強く希望し、次のとおり要望致します。



京都・サッカースタジアムを推進する会
会長　大倉　治彦

Ⅰ．質の高い“90分間”を演出することで、末永く多くの支持が得られるスタジアム

新しい時代のスタジアムには、誰もが非日常的で上質な時間を過ごせることを目指した、ストレスの無い快適な競技・観戦環境と、アクセス整備が必須です。スポーツをする人、観る人のそれぞれに配慮した最高の空間を用意することで、末永く多くの人に選んでもらうためにも、下記の５項目について要望します。

１．　“臨場感”にこだわった設計

・急勾配のスタンドや、ゼロタッチの観客席最前列をスタッフベンチと同列にするなど、ピッチとスタンドが一体となる臨場感にこだわった設計にすること。また実際に海外のコンパクトなスタジアムでプレー経験のある選手の意見等も参考にすること。

２．　ワンランク上の個室観覧席

・収益源となる個室観覧席については、単に個室に区切っただけでなく、ホテル等の監修を受けるなど、ワンランク上のホスピタリティを目指したものにすること。

３．　高度なバリアフリー設計

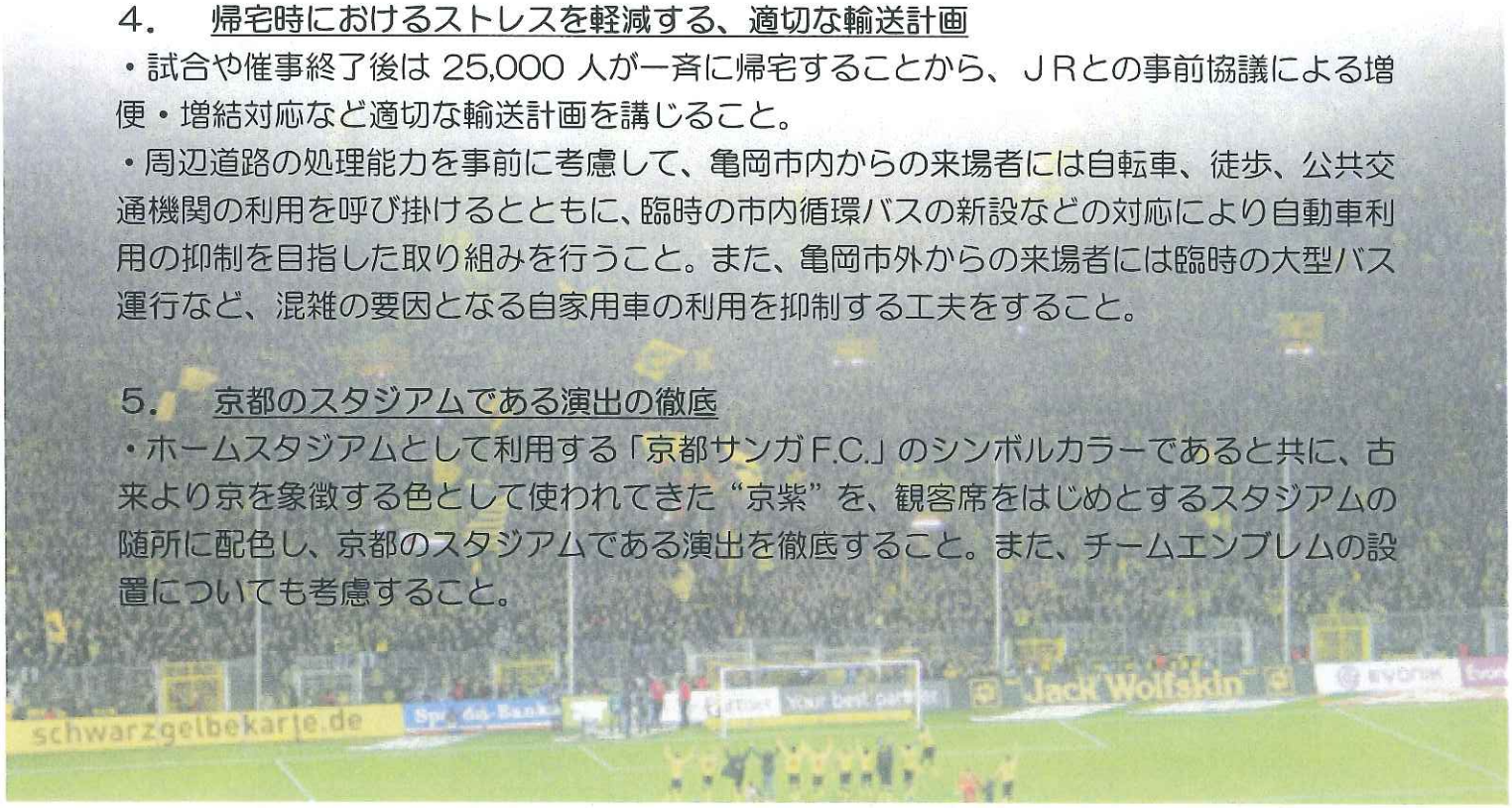
・必要最低限のバリアフリー対応ではなく、身障者や高齢者本人、または介護関係者などの当事者との徹底した意見交換を行い、指定されたエリア以外にも観戦環境の選択肢を複数設けるなど、要望を直接反映すると共に、施設完成後も継続して改善を行うこと。
・球技専用スタジアムでは初めてとなる国土交通省バリアフリー化推進功労者表彰受賞を目指すなど、“観るスポーツ”のバリアフリー化の先進事例になるように取り組むこと。
・多くの来場者が利用するJR亀岡駅や、駐車場からスタジアムまでの動線についてもバリアフリー化を徹底すること。

４．　帰宅時におけるストレスを軽減する、適切な輸送計画

・試合や催事終了後は25,000人が一斉に帰宅することから、ＪＲとの事前協議による増便・増結対応など適切な輸送計画を講じること。
・周辺道路の処理能力を事前に考慮して、亀岡市内からの来場者には自転車、徒歩、公共交通機関の利用を呼び掛けるとともに、臨時の市内循環バスの新設などの対応により自動車利用の抑制を目指した取り組みを行うこと。また、亀岡市外からの来場者には臨時の大型バス運行など、混雑の要因となる自家用車の利用を抑制する工夫をすること。

５．　京都のスタジアムである演出の徹底

・ホームスタジアムとして利用する「京都サンガF.C.」のシンボルカラーであると共に、古来より京を象徴する色として使われてきた“京紫”を、観客席をはじめとするスタジアムの随所に配色し、京都のスタジアムである演出を徹底すること。また、チームエンブレムの設置についても考慮すること。



Ⅱ．フィールドの多目的活用による、新しい文化の発信や収益の確保

新しい時代のスタジアムには、単なるスポーツ施設ではなく新しいライフスタイルを提案する拠点であることを期待しています。なかでもフィールドを使ったコンサート等の大規模な文化催事は、競技による興行以外でスタジアムの収益に大きく貢献する有力な方策であります。利用における制約は極力少なくして多目的に利用できスタジアムを目指し、下記の４項目について要望します。

１．　フィールドを活用したコンサートなどの大型催事対応の設計

・大型ステージの設営などに対応できる基礎工事や、大型重機の搬入経路の設定、音響や照明などの舞台関係設備の設置など、施設運営において財政面で大きく寄与する大型催事に対応した施設にすること。

２．　天然芝の管理徹底と養生体制の構築

・多目的活用に対応するためにも、フィールド１面分の天然芝を常時張替可能な体制を構築すること。養生地は近接地等、市内に完備すること。

３．　騒音対策等、周辺開発計画との調整

・複数の状況を想定した騒音シミュレーションを行うなど、周辺に及ぼす影響とその対応を予め検討すると共に、周辺の開発計画との積極的な連携を図ること。

４．　都市公園関連法規の事前調整

・スタジアム建設地をはじめとする都市公園に指定されたエリア内の活用については、都市公園関連の各種規制により、運用や活用が必要以上に制限されないよう予め調整すること。

Ⅲ．スタジアムを核にした特色あるまちづくり

新しい時代のスタジアムには、周辺とマッチした美しさが必要です。自然と調和しながら、周囲の風景を形づくるランドマークとして、また誰もから愛されるまちのシンボルになることを目指して、下記の４項目について要望します。

１．　スタジアムを核にした街づくりの推進

・スタジアムと共に進化し、周辺整備との連携を強固にした街づくりを行うこと。

２．　コンペ方式による多様な提案からの決定

・外観のデザイン等については、コンペ方式にて決定すること。応募条件には、京都企業の活用や先進的で多彩な観戦環境の提案をはじめ、「京都らしい」ということを盛り込み、外観や素材（建材）等において様々な解釈の「京都らしい」提案の中から選定すること。

３．　周辺の芝生グラウンドの整備

・老若男女がサッカーを気軽に楽しめる環境づくりのためにも、公園内に整備が予定されている芝生グラウンドはもとより、別途整備予定の河川敷等、スタジアム周辺の随所に天然芝または人工芝のグラウンドを複数整備すること。

・スタジアムの敷地面積を極力コンパクトにして、周囲に整備される芝生グラウンドを広くとること。

・スタジアム敷地内に整備される駐車場は、身障者用、関係者用及び大型車両用などアスファルト整備しなければならない箇所以外は人工芝を敷き詰め、試合のある日は一般車両の駐車スペースとし活用し、試合の無い日は多目的広場として活用すること。

４．　付帯設備は地域に必要なものを用意

・スタジアム内に併設する施設については、地域の活性化に資するようなものにすること。

・施設を入れる場合は、運営を開始した後でも造作・改修等がしやすいようにしておくこと。